

共同研究 ● 聖空間の経営人類学的研究 (2008-2010)



オタクやコスプレでにぎわうお台場のコミックマーケット(2008年12月)。

研究会の趣旨

本共同研究の趣旨は会社や都市、世界遺産や宗教聖地などの「聖空間」を経営人類学的に解明することである。1993年度から人類学の筆者と経営学の日置弘一郎が研究代表者となり「経営人類学」ないし「会社文化」の一連の共同研究を継続してきたが、今回「聖空間」にしばって、その発展をはかろうとかがえた。言い換えると、神聖な価値が付与される場所の演出や運営を参与観察や聞き取り調査で実証的に明らかにすることをめざした。

これまでの共同研究において、会社の聖空間については会社神社や企業墓、あるいは企業博物館などをとりあげてきた。だが、創業の聖地や社内の神聖空間についてはまだ十分な掘り下げがなされていないので、調査を重ねればさらに深化できるとかがえたのが一つのきっかけである。また、地域の祭礼や都市の経営、あるいは宗教の聖地に会社がどう関わるかという視点からの研究についても、その進展をはかりたいとおもった。地域の祭礼については、一部のメンバーが調査に取り組んできた阿波踊りやねぶたなどの祭礼があり、一時的な聖空間と化す都市祭礼の経営的側面を分析することが可能であった。他方、都市の経営に関しては、創造都市、多文化政策などを対象に、会社やその従業員、あるいは地元住民

や在日外国人などが聖空間としての都市づくりにいかに参加しているか、あるいは逆に都市がそれをどう演出しているかについての研究をすすめることに意義をみいだそうとした。この分野では新しいメンバーの参加が不可欠であった。最後の宗教の聖地については、教団聖地や世界遺産登録をはたした地域を中心に、宗教関係者だけでなく企業や行政も関わるころの経営的視点からの分析が射程に入っていた。というのも、科研「産業と文化の経営人類学的研究」(研究代表者：中牧弘允、2007年度－2008年度)で世界遺産の聖地を共同調査していたからである。

このような見通しのもと、2008年11月2日に初回の研究会がひらかれた。研究代表者が強調したことは三つの聖空間、すなわち会社、地域(とくに都市)、宗教に照準をあわせることだった。それ以降、1年半にわたる研究会(つまり2009年度まで)において報告された内容を、主にそれら三つの聖空間に対応させて紹介したい。

会社の聖空間

全国銀行協会(全銀協)を聖空間として分析をこころみたのは河野憲嗣である。全銀協は銀行のための業界団体であり、1945年に設立された。そこでは会長を出す銀行(会長行)の輪番制がしかれ、会長行室の人事は将来の頭取ポストへのキャリアのひとつとかがえられている。河野の出向経験によると、そこは酒宴と非公式会合が多く、祝祭空間として機能しているという。また、茶会と似た構造をもち、そこでの振舞いは連歌の付け合いのように同圏性のもので制御され、それをはずすとものごとはすすまない。一方、会長行は「自行に有利」または「他行に不利」なかたちで自行に影響をおよぼす案件を採択するので、会長行の引継ぎのあとの酒宴はおおきく荒れるという。そして、最近まで「金融当局の検査が入らない」といわれてきた聖域でもあったと分析した。

聖空間についてソーシャル・キャピタル論を応用して論じた社会学の晨晃は大連の日本人社会をとりあげ、越境するビジネスマンの生活と聖空間にせまった。大連では日系進出企業と民間社団によるソーシャル・キャピタル投資行動がみられ、信頼・協力などの互惠関係にもとづく規範やネットワーク、あるいは儀式が一種の聖空間をかたちづけていると指摘した。

環黄海の東アジア経済圏における港湾都市の発展を都市の聖空間づくりを視野に入れて分析する曹斗燮の報告もあった。

地域の聖空間

阿波おどりと高知よさこい祭りを長年にわたって追いかけてきた経営学の出口竜也はそれが他府県に伝播し定着していることを聖空間の飛び火としてとらえた。都市祭礼は祝祭空間を演出するが、阿波おどりをささえてきたのは徳島新聞社であり、よさこい祭りは阿波おどりをモデルに高知商工会議所が推進役となった。それは全国から観光客を集めると同時

に、全国に飛び火した。その要因としてまちおこしの手段として「おどり」が有効であったこと、また「連」の結成があらたなコミュニティの機能を果たしている」と指摘する一方、徳島や高知、さらに札幌（YOSAKOIソーラン）がコンテストをとまなう「聖地＝本場」として創造されたことに注目した。

聖空間としての都市についてはワシントンDCと大阪城公園がとりあげられ、建造物や記念モニュメントを手がかりにその聖性を解釈する試みがなされた。ワシントンDCについて神話学者の松村一男は、ローマ共和政を建国のモデルとしたアメリカが理想都市としての「四角いローマ」を実現すべくワシントンDCを構想したと分析した。また、聖地・巡礼地としてのワシントンDCにも着目し、そこは世俗的な神殿群（博物館を含む建造物群）を擁するアメリカ合衆国という国家宗教の聖地とみなすことができると論じた。他方、人類学の犬石徹は大阪城公園に点在する無数のモニュメントの調査に着手し、東京の靖国神社や皇居に比する「特別な場所＝聖空間」としての大阪城公園の性格に着目した。

また、文化都市政策の観点から都市空間の活性化をめざす国内外の創造的取組みの事例が飯笹佐代子によって多数紹介された。そこでは負の遺産やイメージを転換し「聖空間化」する言説や実践に焦点が当てられた。澤野雅彦からは日本野球の「聖地」大連を中心に都市間スポーツ交流についての報告があった。



世界遺産となった孔子ゆかりの聖地、曲阜。

宗教の聖空間

世界遺産に登録されている宗教的聖地はすくなくない。住原則也と筆者は人類学の立場からそれぞれ泰山と曲阜をとりあげ、聖地と文化政策、観光振興、現代ビジネスとの関連等について報告した。世界遺産登録を機に泰山では国際登山節というイベントがはじまり、その目玉の一つとして「泰山・富士山中日友好節」のような行事も組み込まれている。他方、曲阜では孔子の生誕祭が「中国曲阜国際孔子文化節」として盛大に祝われるようになり、「世界儒学大会」も開催され内外に孔子の存在をアピールするようになっていく。曲阜の科技博覧会では孔子をキャラクターに使った教育コンテンツ産業のブースがあり、そうした動向を注視することの重要性が指摘された。

聖地巡礼は伝統的な霊場参詣だけでなく、現代的な新しい現象として生成されている。社会システム論が専門の出口弘



コンテンツ産業にとりこまれた至聖（孔子）の人形。

はお台場のコミックマーケットをとりあげ、3日間で50万人を集める「超多様性市場」であると同時に「物語ビジネスの神話空間」であると分析した。一方、情報人類学の奥野卓司はジャパニクルとして人気の高いポップ・カルチャーが新たな聖地巡礼をつくりだしている事例について報告した。また、ヨーロッパでJ-popフェアが各地で開催されている実態の現地報告がデンマークとイタリアに長期滞在した宇野斎によってなされた。

韓国においては寺院に宿泊するだけでなく韓国文化を学ぶテンプルステイが新たにはじまり、観光行動として注目しているという現状分析が経営学の姜聖淑によって提示された。おなじ韓国でもイスラームにかかわる最新の動向として社会学の岩井洋は仁川の中東文化院をとりあげ、その開館・閉鎖・再開の経緯についてイスラーム関係の「聖空間」どうしが連結するネットワーク概念をつかかって説明を試みた。

大嘗宮の聖空間としての意義をあらためて「重層仮想空間」として歴史的に問う山本匡の報告もあった。

聖空間としての万博

聖空間としての万国博覧会に注目した研究発表もあった。これは科研「上海万博の経営人類学的研究」（研究代表者：中牧弘允、2009年度－2011年度）と連携するものであり、まずは経営史の市川文彦によって19世紀から20世紀にかけてのパリ万博がとりあげられ、万博研究史からの展望が試みられた。万博は人類史上最大規模の博覧会であり、そのテーマや展示には人類史を先取りする神聖な価値が付随することが常である。とくに上海万博は「より良い都市、より良い生活」をメインテーマにかかげ、国家パビリオンや国際機関のゾーンにくわえて、企業パビリオンのゾーンと都市実践区のゾーンを設けており、本共同研究のテーマともある程度合致している。

上海万博の研究は本共同研究のメンバーを中心に目下調査が進行中であり、その成果は逐次報告される予定である。

なかまき ひろちか

民族文化研究部教授。専門は宗教人類学、経営人類学、ブラジル研究。著書に「会社のなかの宗教：経営人類学の視点」（日置弘一郎と共編著 東方出版 2009年）、「会社文化のグローバル化：経営人類学的考察」（日置弘一郎と共編著 東方出版 2007年）、「会社のコミ・ホトケ：宗教と経営の人類学」（講談社 2006年）など。